

学校教育目標

○進んで学ぶ子

○心を磨く子

○元気でやりぬく子

昨年度の成果と課題（○成果 ●課題）

○教科が多岐にわたっていて、様々な活用法を知ることができた。

○授業のねらいを達成するための効果的な活用方法を見つけることができた。

○確かな教材研究の上で活用し授業を進めることの重要性が共通理解できた。

●情報マナーや学習のルールを整える必要がある。

●ICTを無理に使用する場面があった。研修という形で進める段階に来ている。

●十分な学力向上につながらなかった。

研究主題

「わかった！できた！楽しいな！」

～わかる喜び・できる喜びが得られる授業を目指して～

目指す児童像

学習に意欲的に取り組む児童

低学年分科会

中学年分科会

高学年分科会

あおぞら分科会

各分科会の目指す児童像（身に付けさせたい能力）

○友達や先生の話
を聞く児童

○自分の思いや考
えを言葉で伝える
児童

○友達との学び合
い、助け合いがで
きる児童

○自分の思いや考
えを、自分の言葉
で表現できる児童

○友達同士で助け合
い認め合いながら
様々なことに挑戦
し、やり抜くこと
ができる児童

○自分のめあてをも
てる児童

○自分の気持ちをこ
とばで伝えられる児童

○意欲をもって活動に
取り組む児童

研究仮説

子ども達が「わかる」「できる」「認められる」「達成感」を味わうことで、子ども達に「自信」「自尊感情」が芽生え、子ども達に「もっとやりたい」（自発性・自主性）という気持ちが出てくるであろう。

具体的な手立て

【教材の工夫】

【学習形態の工夫】

【学習過程の工夫】

全校共通での取り組み

研究主題に迫るために、全校共通の取り組みとして『振り返りカード』を作成しました。これは、授業の終わりに、1分程度でその日の学習を振り返り、自己評価するものです。この実践を行ったことにより、「児童がその日の学習で何を学び、どのような頑張りがあったかを振り返る習慣を身に付けさせること」「教員がめあてや児童に身に付けさせたいことを常に明確にしながら授業に取り組むこと」ができました。また、振り返りをするすることで、児童も教員も互いに取り組みを振り返り、次回は改善しようとする意識も育ちました。今年度は学年の実態に応じて、一部の教科で実施しましたが、来年度以降改善を重ねながら実施教科を拡大していきます。

低学年用

振り返りカード



名前

☆今日の学習を振り返りましょう。（よくできた◎ できた○ もう少し△）

| 月日 | 今日の学習 | たのしかった。 | てをあげられた。 | めあてをたっせいできた。 | 先生より |
|----|-------|---------|----------|--------------|------|
| / | | | | | |
| / | | | | | |

中学年用

振り返りカード



名前

☆今日の学習を振り返りましょう。（よくできた◎ できた○ もう少し△）

| 月日 | 今日の学習 | 今日のめあてに向かって、楽しく頑張りましたか？ | 自分の思いや考えを書いたり発言したりできましたか？ | 今日の授業の大事なところが分かりましたか？ | 先生より |
|----|-------|-------------------------|---------------------------|-----------------------|------|
| / | | | | | |
| / | | | | | |

高学年用

振り返りカード



名前

☆今日の学習を振り返りましょう。（よくできた◎ できた○ もう少し△）

| 月日 | 今日の学習 | 最後まであきらめずに学習に取り組めましたか。 | 自分の意見や考えを表現することができましたか。 | 今日の学習内容は理解できましたか。 | 先生より |
|----|-------|------------------------|-------------------------|-------------------|------|
| / | | | | | |
| / | | | | | |

低学年分科会

目指す児童像

- ① 友達や先生の話聞く児童 → 説明をもらさず聞き、活動に主体的に取り組む児童
- ② 自分の思いや考えを言葉で伝える児童 → 基礎的な計算の技能を身に付ける児童

研究主題に迫るための手立て（分科会提案でいただいた広義のもの）

○「わかる」手立て

- ① ICT を活用し視覚で問題文を捉える。
- ② 場面を動作化し、文章表現と対応させながら体験的に理解させる。
- ③ 算数ブロックの活用。
- ④ たしざんことばとひきざんことばをまとめて掲示する。
- ⑤ ブロックを動かすときの支援シートの活用。 （⑤のみ必要に応じて使用）

○「できる」手立て

- ① 足し算言葉、引き算言葉を○でかこむ。
- ② 問題文の重要なところにしるしをつける。
- ③ 学習シートを活用する。
- ④ 計算の練習を行うことで正確に問題を解くことができる。

○「楽しいな」と感じるために

- ・ 類似の問題を行うことでできることを実感させる。
- ・ 振り返りを行うことで自分自身の成長に気付かせる。

授業実践

1年 算数 単元名「3つのかずのたしざん、ひきざん」

成果と課題

〈成果〉

- ・ 振り返りカードを使うことで児童の意欲が高まった。
- ・ ICTを活用することでほとんどの児童が問題文を捉えることができた。
- ・ 算数ブロックやブロックを動かす時の支援シートを使うことで問題文を正確に捉え式をたてることができた。
- ・ 類似の問題を解くことでできることを実感させることができた。



〈課題〉

- ・ めあてと本時のねらいがずれていた。めあての言葉を精選する必要がある。
- ・ 教師主導型の授業となっていて学びあう場が少なかった。思考の筋道を伝え合う学びあう場が必要。
- ・ 一年生の発達段階を踏まえた主体的な学びをどう捉えていくのか検討が必要である。



中学年分科会

目指す児童像

- 友達との学び合い、助け合いができる児童 ⇒ 「楽しいな」
- 自分の思いや考えを自分の言葉で表現できる児童 ⇒ 「わかった」「できた」

研究主題に迫るための手立て（分科会提案でいただいた広義のもの）

| | |
|--|--|
| <p>～「わかる」ための手立て～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・接続語・指示語・文末表現・段落分け等の言語事項を意識させるために、ヒントの提示やワークシートの活用をする。 <p>《言語についての知識・理解》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見と友達の意見との違いを知るために、ペアやグループでの意見交流の場を多くし、読みを深めさせる。 <p>《話す・聞く》 【学習形態の工夫】</p> | <p>～「できる」ための手立て～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段落分けや文章構成を確かめ、文章構成図を書かせ、全体の構成をつかませる。 <ul style="list-style-type: none"> ・文末表現を意識させ、やったこと(実験)と分かったこと(事実)を区別させる。 <p>《書く》 《読む》</p> |
| <p>～「楽しいな」と感じるために～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童への調査をもとに、導入部分で、教材以外の科学読み物にも親しませる。 ・「2年生へ科学読み物を紹介する」という目標を設定し、単元を学習する必然性をもたせる。 <p>【教材の工夫】【学習過程の工夫】 ・興味をもたせるための観点を提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学び合い・認め合いの意識を継続させる。 《関心・意欲・態度》 | |

授業実践

3年 国語 単元名「ありの行列」

成果と課題

〈成果〉

- ・本時まで、丁寧な段落分けや読み取り学習を重ねてきたことで内容、構成への理解が深まった。
- ・指示語や接続語などの言語事項の意識のため、系列だったワークシートを有効に活用できた。
- ・自分の考えをまとめたり、書いたりして発表するとともに、友達に伝えることの楽しさを感じられた。
- ・科学読み物として、対象物の不思議や研究者の考え方などに注目させ、他の科学読み物やその内容への興味を引き出すことができた。

〈課題〉

- ・研究者の考え方や実験手法を学ぶ上で、文末の表現で分けさせることが適切であったか課題が残った。
- ・注目させたい内容、興味を持ってもらいたい部分へのアプローチを誘導的に進めざるをえず、その点で、児童の自由な発想からは離れた（が、わかった！できた！のプロセスとしては重要である）。
- ・自分の意見を伝える、相手の意見を聞くことはできていたが、話し合いそのお互いの理解を深める活動までは、発達段階として難しいと判断したが、より「楽しいな」にはつなげたかもしれない。



高学年分科会

目指す児童像

○友達同士で助け合い認め合いながら様々なことに挑戦し、やり抜くことができる児童

研究主題に迫るための手立て

「わかる」ための手立て

- ・学習カードの活用→振り返りから自分の課題を明確にさせ、解決を目指す。
- ・ナイスボードの活用→友達の良い動きを自分の動きに取り入れる。

「できる」ための手立て

- ・めあてに合わせたウォーミングアップやゲーム
→伸ばす技能を明確に示し、児童が1時間の中で成長を実感できるようにする。
- ・どのチームにも勝つチャンスのあるルールの工夫→「勝つ」ことが「できる」の実感につながる。

「楽しいな」と感じるための手立て

- ・ナイスボードの活用
→励ましや称賛の声掛けをクラスで共有することで、のびのびと活動できる雰囲気をつくる。
- ・見通しのもてる学習過程
→毎時の授業をほぼ同じ展開（基本の運動→ゲーム1→ゲーム2）で行うことで、安心して学習に取り組める。
- ・見てわかる掲示の工夫
→いつでも活動内容を確認できるように掲示することで、安心して活動に取り組める。

授業実践

5年 体育 単元名「バスケットボール」

成果と課題

〈成果〉

- ・ナイスボードの活用により、児童が前向きな声掛けをするようになり、意欲的に活動できるようになった。そのため、バスケットボールが苦手な児童も、自分でもできる役割を見つけてポジションや動きを考えていた。
- ・ナイスボードの活用により、試合に生きる様々な技能を積み重ねることができていた。作戦会議の際には、そうした技能を生かした作戦を積極的に考え、試合で生かしていた。



〈課題〉

- ・当日、欠席者や見学者が多く1チーム減ったことで試合をせずに課題別練習を行うチームができてしまったが、教師の指導が試合をしているチーム中心となってしまう、指導、助言が少なかった。立ち位置を工夫し、常に全員を指導できるような工夫が必要だった。
- ・チームに能力の偏りがあり、勝つことがなかなか厳しいチームがあった。どのチームにも勝てるチャンスがあるようなルールの工夫や、児童の実態を綿密に把握したチーム分けが必要だった。



あおぞら分科会

目指す児童像

- 自分のめあてをもてる児童
- 自分の気持ちを言葉で伝えられる児童
- 意欲をもって活動に取り組む児童

研究主題に迫るための手立て

○「楽しいな」と感じるための手立て

- ・『できたよカード』などにシールを貼ったり花丸を描いたりすることで、達成感を実感させたり、再挑戦意欲を持続させたりする。
- ・在籍学級と連携を図り、在籍学級で「できた」ことを承認する。
- ・自分の力で「できた」ことを、承認する。

○「わかる」ための手立て

- ・児童の実態を、多面的に把握する。
- ・児童の実態に応じた最近接課題（少しの頑張りのできる課題）を取り上げ、スモールステップの授業を展開する。
- ・在籍学級と連携を図り、先取り学習を行う。
- ・1指示1動作や「これからやることを〇こ、話します。」など、指示は短く端的にする。
- ・学習の流れや内容を、視覚的に提示する。

○「できる」ための手立て

- ・やろうとしていること、できていることを承認し、意欲を持続させる。
- ・自分でできるための練習方法を一緒に考えたり、失敗したり間違えたりしたときの解決方法を事前に伝え、一人でできるように働きかける。

授業実践

4年4名 自立活動 単元名「相手と合わせよう」

成果と課題

〈成果〉

- ・スモールステップで、ペア活動を行った結果、自分の考えや意見を相手に言えるようになった。

〈課題〉

- ・積極的に話し合いに参加できなかった児童もいたため、話型を見せるだけでなく、具体的な発話を復唱させるなどすべきだった。
- ・「ルールがわかった！」と思えるような手立てが不十分だった。



2年1名 自立活動 単元名「自分の力」

成果と課題

〈成果〉

- ・「1m = 100cm」がわかった。
- ・漢字の構成に着目するようになった。
- ・読みにかかる時間が半分になった。

〈課題〉

- ・スモールステップになっていない部分があった。
- ・長さの学習における、読みのつまずきへの手立てが不十分だった。
- ・対象児童の強みを生かした手立てではなかった。



研究の成果と課題

〈成果〉

○各分科会で「わかる」「できる」「楽しい」とは何かを考え、研究授業では、各学年や各教科で、「わかる」「できる」「楽しい」ための手立てが明確に示され、そのための具体的な方法が示された。

○研究授業を行うにあたり、実態を把握する必要があるとあり、研究を通して児童理解が深まった。

○講師からは、授業の講評や今後の研究についての方向性等お話しして頂き皆が学ぶことができた。実りの多いフィードバックが可能となり、教員全体での探求がより深まった。

○児童が内容を理解できて、学習に対する意欲が高まることが理解できた。ノートやワークシート・机間指導等で確認する機会が増え、それがよりよい教材研究につながった。また、ふり返しカードを使用することで、教員が児童に学習の目的を明確に伝えるようになった。

〈課題〉

○「わかる・できる・楽しい」との解釈や視点が、各部会でぼやけてしまった。また、「わかった」「できた」「楽しい」と児童が感じているのは、どこから感じとればいいのか難しかった。

○喜びをもって学習する児童も増えたが、定着したり、応用を自力解決したりすることが反復練習を経ても難しい児童は何人かいた。更なる具体的な方向性や支援の仕方を研究することや、学年の繋がりとしてどんな支援をしていくか、共通理解が必要である。

おわりに

副校長 金高 俊哉

「先生、なんで勉強するの？」と子どもからこう聞かれたら、みなさんは教師としてどう答えますか？そして、実際に子どもはどのように考えているのでしょうか。

以前、受けもっていた6年生にこのことを聞いたことがあります。その答えは、概ね次のようなものでした。

- ・勉強はできないよりできた方がいいし、将来、勉強ができた方が役に立つから。
- ・将来の自分のため。社会に出るためにはあたりまえのことを知っていなければ恥ずかしいから。

多くの子どもの答えは、「将来のため、社会に出て困らないためやらねばならないから」というものでした。子どもたちは、学習は将来のための修行と考えているのです。これは正直な意見でしょう。このような学習観は、もともと子どもたちがもっていたものではなく、現代の社会や、教師や親を含む大人たちが作ったものだと思います。本来教室は、

「どうして、そうなるのかな？よし調べてみよう。」

「ああ、なるほど、そういうことだったのか。分かったよ！おもしろいね。次はこれをやりたいな。」

というような言葉が行き来するところのはずです。ところが、現実には

「要するにこうやればいいのか。これをおぼえればいいのか。分かったよ。で、どこまでやれば終わりになるの？」

という言葉が教室の中を満たしているのではないのでしょうか。

本来の学ぶ楽しさを子どもたちに実感させたい。そんな願いをもって始めた本研究です。「わかるようになるため」「できるようになるため」どのような手立てが必要か、1年間実践と研究を積み重ねてきました。研究が進むにつれて、我々が目指しているものがとても重要なことであり、しかし、とても難しいことだということが分かってきました。今年度の研究で得たものを糧にさらに次年度以降、研究を深めていきたいと考えています。

結びになりますが、研究を進めるにあたって、貴重なご指導を賜りました前稲城市立稲城第六小学校長 石川清一郎様、西東京市立谷戸小学校主任教諭 栗原光世様、前東京都教職員研修センター授業力向上課教授 矢口英明様、本当にありがとうございました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。